吉田初三郎鳥瞰図に描かれた昭和初期の官庁街の立体的空間構成

—近世城下町を基盤とする県庁所在都市18都市を対象として—

3D SPATIAL COMPOSITION OF CIVIC CENTER IN THE EARLY SHOWA ERA
WITH BIRD'S-EYE VIEW PICTURES BY YOSHIDA HATSUSABURO

In cases of 18 prefectural capital cities based on Japanese castle-towns

松浦 健治郎*

Kenjiro MATSUURA

This paper aims to clarify 3D spatial composition of Civic Center in the early Showa era with bird's-eye view pictures by YOSHIDA Hatsusaburo in cases of 18 prefectural capital cities based on Japanese Castle-Towns.

First, I indicate necessity of complementing by topographical map, photographs and pictures in case of using bird's-eye view pictures by YOSHIDA Hatsusaburo as research material, because characteristic of them is deformation, and examine their possibility of research material.

Findings are as follows: 1) We can grasp arrangement conditions and facades of each government and municipal offices, whole construction of Civic Center and physical state of surrounding Civic Center with bird's-eye view pictures, 2) As a result of analysis 3D spatial composition of Civic Center with bird's-eye view pictures in cases of 18 cities, there was principle of 3D Urban Design answer to spatial composition of Castle Districts such as main road, moat and skirt of mountain.

Keywords: Civic Center, bird's-eye view pictures by YOSHIDA Hatsusaburo, the early Showa era, Japanese Castle-Towns, Modernizing process, 3D spatial composition

官庁街、吉田初三郎鳥瞰図、昭和初期、城下町都市、近代計画史、立体的空間構成

1. 研究の背景と目的

本研究は近世城下町を基盤とする府県庁所在都市における近代の官庁街^{注1)}の形成過程を分析する一連の研究である。これまでの研究により、廃藩置県後の明治・大正期には、官公庁施設は城郭に近接した位置に集積して立地し官庁街を形成する傾向が強いことが明らかとなっている¹⁾。

本稿では、「大正の広重」と呼ばれた鳥瞰図絵師吉田初三郎が描いた鳥瞰図（以下、吉田初三郎鳥瞰図とする）に着目し、吉田初三郎鳥瞰図の存在が確認された18都市を対象として吉田初三郎鳥瞰図に描かれた昭和初期の官庁街の立体的空間構成を解明することを目的とする。立体的空間構成を解析する資料として吉田初三郎鳥瞰図を用いる理由は、昭和初期における日本各地の多くの都市が描かれていることや、平面的な地図では得られない3次元の空間情報を得ることができるからである。吉田初三郎鳥瞰図は「初三郎式鳥瞰図」と呼ばれるほど独特で大胆な描画法から今なお多くのコレクターが存在する。しかし、その特異と故に当時から実用性に欠けるとの評価があったのも事実である。そのため本稿では、吉田初三郎鳥瞰図の研究資料としての可能性を明らかにした上で、吉田初三郎鳥瞰図の存在が確認された18都市を対象として吉田初三郎鳥瞰図に描かれた官庁街の立体的空間構成を解明する。

2. 既往研究との関連

本研究と既往研究との関連について、官庁街の都市デザイン手法に関するものと吉田初三郎鳥瞰図に関するものに分けて整理する。

官庁街の都市デザイン手法に関する既往研究については、官公庁施設単体に関する建築史・建築計画的分析と官庁街に関する都市デザイン分析の2つに分かれる。官公庁施設単体の代表的なものとして府県庁舎と市庁舎がある。府県庁舎の建築史的考察については、菊池重郎²⁾と石田潤一郎³⁾が詳しく分析している。菊池は明治期から昭和期までの府県庁舎建築の史的経緯を展望しており、石田は明治維新から現在までに建てられた全ての都道府県庁舎についてその具体的な様態を明らかにした上で歴史的特質を考察している。市庁舎については佐藤武夫⁴⁾、鍋田道雄⁵⁾、中井邦夫・坂本一成⁶⁾がある。佐藤、鍋田は市庁舎建築の平面計画や動線計画について分析しており、中井らは市庁舎建築を外形ヴォリュームの集合として捉え、それらの類型化を行っている。官庁街については、東京を藤森照信の一連の研究^{7)~13)}・野嶋敏ら¹⁴⁾が、山形・宇都宮を佐藤 滋・野中勝利¹⁵⁾が、山形を野中勝利¹⁶⁾が、それぞれ分析している。本研究では、吉田初三郎鳥瞰図に描かれた昭和初期の官庁街の立体的空間構成を城下町基盤との関係から明らかにする。

吉田初三郎鳥瞰図については、吉田初三郎¹⁷⁾や水野信太郎・水野由美¹⁸⁾により、その人間性と鳥瞰図の特徴、鳥瞰図の一覧が明らかにされている。水野らは、「他の都市や地域にはない固有の景観や風景という遺産を再発見する作業が現代都市計画の最先端の発想に基づくまちづくりには不可欠なのである^{注2)}」との考えから、自らの研究の意義のひとつに「今日の都市計画にとっても有用な研究成果として一石を投じることができる^{注2)}」と述べているが、吉田初三郎

* 三重大学大学院工学研究科建築学専攻 助教授・工博

Assistant Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Mie Univ., Dr. Eng.

鳥瞰図を用いた都市計画的活用のための分析研究はまだ行われていない。本研究では、吉田初三郎鳥瞰図を当時の立体的な都市空間を映し出す貴重な資料として位置づけ、その有効性を検討した上で官庁街の立体的空間構成の分析に用いる。

3. 研究の方法

本研究は以下の4つの方法により分析を行った。

第1に、吉田初三郎本人による文献により吉田初三郎鳥瞰図の特徴を分析した。

第2に、吉田初三郎鳥瞰図の中から「名古屋市鳥瞰図」(図1)を取り上げて、吉田初三郎鳥瞰図と地形図^{注3)}に描かれている路面電車の路線位置の比較を行うことにより、吉田初三郎鳥瞰図の正確性を分析した。なお、名古屋を事例にした理由は、都心部の街路がグリッドを基調とした明快な構成であることと、吉田初三郎鳥瞰図に描かれている施設の多くが現存していることである。

第3に、「名古屋市鳥瞰図」の中で誇大化されて描かれている官公庁施設等の形状について現存する施設の写真との比較を行うことにより、施設の立面形状の正確性を分析した。

第4に、近世城下町を基盤とする県庁所在都市の中で、吉田初三郎鳥瞰図の存在が確認され、かつ、市街地内の建物が立体的に表現されている18都市(表1)の吉田初三郎鳥瞰図を対象として、吉田初三郎鳥瞰図から主要な要素^{注4)}を抽出した吉田初三郎鳥瞰図から読み取れる官庁街の立体的空間構成モデルを各都市毎に作成し、この立体的空間構成モデルから官庁街の立体的空間構成を分析した。分析の際には、1) 観光名所・ランドマークを示す赤・青の札と官公庁施設との関係を分析し、2) 同時期の都市地図^{注5)}で官庁街を構成する官公庁施設等^{注6)}の位置を確認した上で、3) 施設の正面性(玄関と門の位置より判別)、オープンスペースの位置、施設が面する外部空間(堀、山裾、川、主要街路^{注7)})に着目して施設の

立地形式を分析し、それらの組み合わせによる官庁街の立体的空間構成を把握した(図2)。

4. 吉田初三郎鳥瞰図の特徴と有効性の検証～名古屋を対象として

(1) 大胆なデフォルメによる描画

吉田初三郎の鳥瞰図には「初三郎式」と呼ばれる独自の特徴がある。その中でも最も特徴的でユニークな点はデフォルメである。例えば「名古屋市鳥瞰図」(図1)を例に取ると、あくまで画面の中心は名古屋の市街地を描きながらも、図の周縁部では東端に東京駅や富士山が描かれ、西端に朝鮮半島の釜山までが描かれている(図3)。鳥瞰図の一般的な技法ではこれらの広大な領域を同じ画面に描くことはできないが、図を極端に湾曲させることでこれを可能にしたのである。一方、市街地部分では、周縁部とは対照的に無焦点で直線的に描かれていることがわかる(図4)。このように吉田初三郎鳥瞰図では直線的に描かれる市街地と曲線的に描かれる周縁部という対比的な構図が特徴的である。

また、図を極端に湾曲させるという手法のほかに、吉田初三郎鳥瞰図では主要な建物や名所が極端に誇張して描かれるという特徴もある。この点について、初三郎が鳥瞰図について論じた小論には次のように記されている。

「平面圖を立體的鳥瞰圖に再現するのであれば、其の骨組みの根本は、自然のまゝの山水布置にあるのであらうが、私のは決して然うではない。従つて私の作品に於いては、必要と思はれる中心點が随所で擴大されて、他は其の交通關係を示しつつ、全體の調子を繋いでをるに過ぎないのである。^{注8)}」

この記述から、吉田初三郎鳥瞰図の特徴として、

- ①地図から直接立体化したものでないこと、
 - ②いくつかの「中心点」(誇張して描かれる部分)以外に関しては、「調子を繋ぐ」程度にしか描かれていないこと、
- が窺える。

①に関しては、地形図との比較分析でも裏付けられる。図5は、地形図から路面電車の路線をトレースしたものと吉田初三郎鳥瞰図から路面電車の路線をトレースしたものを図の円で囲まれた3つの交叉点を基準に重ね合わせたものである。その結果、路面電車の路線数は正確であるが、路線の位置は必ずしも一致しないことが分か

図2：鳥瞰図分析の方法(福島市及飯坂温泉名勝鳥瞰図に一部加筆)

表1：分析に用いた吉田初三郎鳥瞰図一覧

都市名	表紙タイトル	鳥瞰図名	発行所	発行年	所蔵
1 盛岡	盛岡市	盛岡市鳥瞰図	盛岡市役所	S.11	*1
2 秋田	秋田市	秋田市鳥瞰図	秋田市役所	S.9以降	*1
3 福島	福島市及飯坂温泉	福島市及飯坂温泉名勝鳥瞰図	福島市役所	S.9	*1
4 水戸	水戸市	水戸市鳥瞰図	水戸市役所	発行年不明	*2
5 前橋	前橋市	前橋市景勝交通鳥瞰図	(原画)	S.9	*3
6 富山	富山	富山市を中心とする県下名勝鳥瞰図	産業観光富山、宣傳會	S.7以降	*1
7 金沢	金沢市	金沢市鳥瞰図	金沢市役所	S.5以降	*1
8 福井	福井市	福井市鳥瞰図	福井市役所	S.10	*4
9 甲府	甲府市鳥瞰図	甲府市鳥瞰図	全日本産業観光甲府大博覧會	発行年不明	*2
10 名古屋	名古屋市	名古屋市鳥瞰図	名古屋汎太平洋平和博覧會事務局	S.12	*2
11 津	津市	津市を中心とする名所交通鳥瞰図	津市役所	S.5以降	*2
12 岡山	岡山市	岡山市を中心とする鳥瞰図	岡山市産業課	S.7	*2
13 広島	宮島広島名所図	宮島広島名所交通図	広島瓦斯電軌株式会社	S.3	*2
14 徳島	とくしま	徳島及小松島を中心とする鳥瞰図	観光社	S.6	*2
15 松山	松山道後名所図	松山道後を中心とする名所交通図	観光社	S.2	*2
16 高知	高知市案内	高知市付近名所大図	高知市役所	S.5	*2
17 福岡	福岡市	福岡市鳥瞰図	博多商工會議所	S.11	*2
18 鹿児島	鹿児島	鹿児島桜島鳥瞰図	(原画)	S.10	*3

*1:北海道大学浅井学園水野研究室、*2:京都府立総合資料館、*3:鳥瞰図の周字屋、*4:名鉄資料館

図1：名古屋市鳥瞰図(昭和12年発行、京都府立総合資料館所蔵、に一部加筆)

る。このことから、吉田初三郎鳥瞰図は地図を基に描かれたとは考えられない。

次に、吉田初三郎鳥瞰図の中で誇大化されて描かれた施設の中で現存する施設（名古屋城、県庁舎、市庁舎）の絵と実物の写真との比較を行った（図6）。その結果、名古屋城は実際よりも大きく描かれており、並んで建っている県庁舎と市庁舎を比較すると、市庁舎は実際よりも大きく描かれ、その結果、県庁舎のプロポーションは実際よりも縦長となっている。このことはクライアントである名古屋市政府に配慮した結果だと考えられる。以上の分析の結果、施設のプロポーションや大きさについては吉田初三郎鳥瞰図と写真との間に明らかな差異が認められるが、施設の外観や配置についてはおおむね正確に描かれていることが分かる。初三郎は吉田初三郎鳥瞰図の特徴について次のように述べている。

「然し私の作り出さんとする名所圖繪は單なる一枚のスケッチではなく、幾十枚幾百枚のスケッチが集って其處に一個の鳥瞰的圖繪を構成せんとするのである。即ち部分々々に就いては飽くまで忠實な

自然描寫であるが、一度これを綜合する時に於いて、きわめて人為的となり初三郎式となる^{注9)}。」

以上の記述から、吉田初三郎鳥瞰図は現地の入念な踏査写生をもとにしており、それを前提とした上で彼なりのアレンジが加えられたことがわかる。すなわち、誇大化されて描かれている施設の外観や配置については正確だと判断できる。

（2）観光地図としての鳥瞰図

吉田初三郎鳥瞰図のもう一つの特徴は、旅行者のための観光地図として描かれているという点である。吉田初三郎鳥瞰図が描かれる大正末期から昭和にかけては、鉄道や航路の発達とともに全国的な観光ブームが生まれた時期であり、初三郎は鉄道会社などの商業資本や地方公共団体からの依頼を受け、対象となる観光地や都市を多数描いたのである。そのため、初三郎は「名所と交通の關係を示して旅行者の便益に資し^{注10)}」、「萬人が見て楽しみながら解り得べきもの^{注11)}」となるように吉田初三郎鳥瞰図を描いた。具体的に配慮した点として、1) 観光名所にデフォルメを施すこと、2) 交通機関を

図3：湾曲して描かれる周縁部（名古屋市鳥瞰図部分に一部加筆）

図4：無焦点で描かれる市街地（名古屋市鳥瞰図部分）

図5：鳥瞰図と地形図による路面電車の路線の比較（名古屋）

図6：吉田初三郎鳥瞰図と写真との比較（名古屋市鳥瞰図部分）

表2：「名古屋市鳥瞰図」の札に書かれている名所一覧

自然	歴史的資源	近代都市施設
山・川	社寺	官公庁施設
伊吹山	●熱田神宮	○市役所
谷汲山	●伊勢神宮	○新県庁
金華山	外宮	県庁
本宮山	内宮	控訴院
八幡山	東照宮	真清日神社
虎溪山	損斐川	若宮神宮
猿投山	庄内川	●大須観音
朝熊山	養老滝	荒子観音
陀武天山	千本松	時志観音
駒ヶ岳	浜名湖	笠寺観音
御岳	つぶてヶ浦	甚目寺
地名	定光寺	八幡神社
●覚王山	満州新京	龍泉寺
●八事	朝鮮	浄源寺
●東山公園	志賀公園	妙行寺
●鶴舞公園	中村公園	常泉寺
●中村公園	日光公園	信貴山別院
森林公園	徳川園	日蓮寺
その他	史跡	○商工会議所
●乳太平洋平和博覧会会場	●名古屋城	○五百羅漢
●サンドスキー場	●犬山城	○商工館
運動場	●清洲城址	○野間御坊
動物園	●岡崎城址	○観光案内所
	●白鳥陵	○貿易斡旋所
	加藤清正誕生地	○放送局
	豊臣秀吉誕生地	○七里の渡跡
		○桶狭間放送局
		○各務原飛行場
		○鉄道工場
		○忠魂碑
		○奉安塔
		○伊勢大橋
		○尾張大橋
		○空港橋
		○ドック
		○大仏
		○降門口
		○観光ホテル
		○万平ホテル
		○大ーホテル
		○蒲郡ホテル
		○東海橋

凡例 ●：赤色の札、○：青色の札、なし：白色の札

描くこと、3) 観光名所や交通機関の近くに札を描きその名称を記すことが挙げられる。この札は大きく2種類に分類できる。ひとつは、地名や施設名が記された長方形の札であり、もうひとつは、鉄道や路面電車の駅名が記された角の丸い札である。初三郎はそれぞれの札を重要度に応じてさらに2つあるいは3つに描き分けている。

名古屋の場合、地名・施設名を記した札は、赤色・青色・白色の3種類、鉄道駅名を記した札は青色・白色の2種類である(図7)。それぞれの色の札に記されている名称や吉田初三郎鳥瞰図の裏面にある名所に関する説明文から^{注12)}、赤色は吉田初三郎鳥瞰図

地名・施設名等			鉄道駅名	
市役所	公会堂	名古屋駅	市役所前	
赤色	青色	白色	青色	白色

図7:「名古屋市鳥瞰図」における札の例

内における主要な観光名所であり、青色はランドマーク的な建物であると思われる(表2)。このように、特に強調させたい施設や場所の札に赤や青の着色を施すことにより、他との差別化を図っている。官公庁施設について見ると、県庁舎や市庁舎を始めとして11の施設に札があり、市庁舎と新県庁舎は青札であることからランドマーク的な施設として認識されていることが分かる。

5. 吉田初三郎鳥瞰図から読み取れる官庁街の立体的空間構成～18都市を対象として

(1) 各都市の分析

1) 盛岡～内丸通り沿いに形成された官庁街

盛岡では、内丸通りに沿って官公庁施設、教育施設、文化施設、医療施設等が建ち並んでおり、一軸沿道型の官庁街が形成されている(図8)。

藩政期には広小路であった内丸通り沿いに県庁舎、裁判所、警察署、公会堂等が建ち並び、内丸通りのアイキャッチの位置に市庁舎が立地している。建物の正面性を見ると、裁判所、県庁舎、公会堂、市庁舎が内丸通りに正面性を有することが確認された。内丸通りは城址公園(岩手公園)にも面していることから、城址公園と一体となった官庁街が形成されていたことが分かる。

2) 秋田～大手道沿いの堀や川沿いに形成された官庁街

秋田では、大手道沿いの堀や川沿いに官公庁施設等が建ち並び官庁街が形成されている(図9)。

市街地の中央を南北に流れる旭川沿いに県庁舎、市庁舎(以上は旭川に正面性を向けて立地)、物産館が立地している。特筆すべきこととして、県庁舎は大手道のアイキャッチの位置に正面性を向けて立地していることが挙げられる。大手道の内堀沿いには裁判所、女子師範学校が内堀に正面性を向けて立地している。

3) 福島～大手道沿いに形成された官庁街

福島では、大手道の両側に官公庁施設、教育施設、医療施設等が建ち並び一軸沿道型の官庁街が形成されている(図10)。

大手道沿いに、第一小学校、市庁舎、大原病院、郵便局、警察署、公立福島病院、県会議事堂が建ち並び、大手道のアイキャッチの位置には県庁舎が位置している。建物の正面性を見ると、県庁舎、市庁舎、警察署、県会議事堂が大手道に正面性を有することが確認された。

4) 水戸～大町通り沿いに形成された官庁街

水戸では、大町通り沿いに官公庁施設、軍施設、教育施設が建ち

図8:盛岡の官庁街の立体的空間構成モデル(昭和11年)

図9:秋田の官庁街の立体的空間構成モデル(昭和9年以降)

図10:福島の官庁街の立体的空間構成モデル(昭和9年)

図11:水戸の官庁街の立体的空間構成モデル(発行年不明)

図12:前橋の官庁街の立体的空間構成モデル(昭和9年)

図13:富山の官庁街の立体的空間構成モデル(昭和7年以降)

並び、官庁街が形成されている（図 11）。

大町通り沿いには警察署、営林署、司令部が建ち並び、県庁舎は大町通りのアイキャッチに正面性を向けて立地している。なお、大町通りについては宮本雅明¹⁹⁾が本丸の二階櫓へのビスタラインと指摘している。

5) 前橋～大手道沿いに形成された官庁街

前橋では、大手道沿い及び大手道のアイキャッチに官公庁施設が建ち並び、官庁街が形成されている（図 12）。

大手道沿いには、群馬會館、裁判所、市役所、図書館、郵便局が建ち並んでおり、この内、群馬會館、裁判所、市役所では大手道に正面性を向けていることが確認された。大手道のアイキャッチの位置にある本丸跡には県庁舎が立地している。都市地図及び写真で確認した結果、大手道のアイキャッチの位置には県会議事堂が位置していた。

6) 富山～大手道沿いと堀沿いに形成された官庁街

富山では、大手道沿い及び堀沿いに官公庁施設等が建ち並び、官庁街が形成されている（図 13）。

大手道沿いには市庁舎、図書館、警察署、商品陳列所、商工会議所、郵便局が建ち並んでいる。内堀沿いには県庁舎、県会議事堂、図書館、市庁舎が建ち並んでおり、親水空間と一体となった官庁街が形成されている。建物の正面性については県庁舎と図書館が内堀に正面性を向けて立地していることが確認された。

7) 金沢～広坂通り沿いに形成された官庁街

金沢では、商業の中心地である香林坊から東側に伸びる広坂通り沿いに官公庁施設、教育施設が建ち並び軸状に官庁街が形成されている（図 14）。

広坂通り沿いには、県庁舎、市庁舎、県会議事堂、第一高等女学校、女子師範学校、高等学校が建ち並んでいる。この一帯は、藩政期末期には藩校、火除地、武家屋敷として利用されていた。建物の正面性については、県庁舎、市庁舎、県会議事堂、第一高等女学校、高等学校が広坂通りに正面性を向けていることが確認された。

8) 福井～屈曲する大手道沿いと堀沿いに形成された官庁街

福井では、屈曲する大手道沿いと堀沿いに官公庁施設、教育施設、文化施設が建ち並び官庁街が形成されている（図 15）。

屈曲する大手道沿いに図書館、市庁舎、市公会堂が大手道に正面性を向けて立地し、大手道のアイキャッチには県庁舎が大手道に正面性を向けて立地している。東の内堀沿いには武徳殿、営林署、専売局出張所が建ち並んでいる。

9) 甲府～大手道沿いに形成された官庁街

甲府では、大手道沿いに官公庁施設、文化施設、医療施設が建ち並び、官庁街が形成されている（図 16）。

大手道沿いには郵便局、警察署、裁判所、県病院が建ち並んでいる。甲府では、明治期に県令藤村紫郎により大手道沿いの再開発が実施され、計画的な官庁街が整備されたが、その官庁街が多少の移動を伴いつつも昭和初期まで継承されている様子がよく分かる。山裾沿いには、武徳殿、議事堂、縣廳が山に背を向けて立地している。

10) 名古屋～大津通り沿いに形成された官庁街

名古屋では、大津通り沿いに帝冠様式の県庁舎、市庁舎が正面性を向けて建ち並び、官庁街が形成されている（図 17）。

11) 津～城址を中心として分散立地して形成された官庁街

図 14：金沢の官庁街の立体的空間構成モデル（昭和 5 年以降）

図 15：福井の官庁街の立体的空間構成モデル（昭和 10 年以降）

図 16：甲府の官庁街の立体的空間構成モデル（発行年不明）

図 17：名古屋の官庁街の立体的空間構成モデル（昭和 12 年）

図 18：津の官庁街の立体的空間構成モデル（昭和 5 年以降）

図 19：徳島の官庁街の立体的空間構成モデル（昭和 6 年）

津では、城址を中心として街道沿いと内堀沿いに官公庁施設、教育施設が分散立地して官庁街が形成されている（図 18）。師範学校と裁判所は内堀に正面性を向けて立地しており、市庁舎と郵便局は旧街道に正面性を向けて立地している。

12) 岡山～分散立地して形成された官庁街

岡山では、官公庁施設が分散立地して官庁街が形成されている。県庁舎の周辺に県会議事堂、裁判所、女子師範学校、武徳殿、商品陳列所が立地している。この鳥瞰図は水墨画風のぼんやりとしたタッチで描かれているため、建物の正面性や配置形式は確認できない。

13) 広島～分散立地して官庁街を形成しない

広島では、官公庁施設は分散立地しており、官庁街が形成されていない。本川と元安川の間の三角州には県庁舎、県会議事堂、武徳殿、県病院が分散立地している。一方、本安川の東岸には市庁舎、公会堂、図書館が分散立地している。鳥瞰図からは建物群としてのまとまりを感じられない。

14) 徳島～新町川沿いの県庁舎と鷺の門付近に形成された官庁街

徳島では、川沿いと城の正門付近に官庁街が形成されている。新町川の川岸には県庁舎、中学校が新町川に正面性を向けて立地している（図 19）。一方、市庁舎、裁判所、警察署、物産陳列所は徳島城の正門である鷺の門付近に集積され、官庁街が形成されている。警察署の形態は街区の角に合わせてL字型となっており、西欧的な配置が特徴的である。

15) 松山～山裾に形成された官庁街

松山では城山の裾野に官公庁施設等が建ち並び官庁街が形成されている（図 20）。城山の南の裾野には県庁舎、商品陳列所、裁判所、赤十字支社が山を背にして建ち並んでいる。この空間構成は現代も変わっていない。

16) 高知～山裾に形成された官庁街

高知は城山の山裾に官公庁施設が建ち並び官庁街が形成されている（図 21）。前述した松山と非常によく似た空間構成である。城山の南側の裾野に県庁舎、県公会堂が城山を背にして堀に正面性を向けて建ち並んでいる。また、旧広小路沿いには市庁舎が立地している。この広小路から高知城に延びるビスタラインは宮本雅明²⁰⁾が指摘している。

17) 福岡～明治通り沿いに形成された官庁街

福岡では、明治期に整備された明治通り沿いに県庁舎、市庁舎、郵便局が集積し官庁街が形成されている（図 22）。建物の正面性は確認できない。

18) 鹿児島～一軸状に形成された官庁街

県庁舎、市庁舎、郵便局、中央公民館が一軸状に建ち並び官庁街が形成されている（図 23）。昭和 10 年に描かれた鳥瞰図であるが、市庁舎の位置が昭和 12 年に移転した位置にあることと、市庁舎の前面に広幅員の戦災復興街路が描かれていることから、実際の年代は戦後あたりと思われる。なお、同年代の都市地図を見ると、市庁舎の向かい側には裁判所、警察本部が立地している。

(2) 札と官公庁施設との関連

赤と青で塗られた長方形の札を自然・歴史的資源・近代都市施設に分類して、集計した（表 3）。近代都市施設は 15 と少なかったが、その中で官公庁施設は 10 施設（内 7 施設が市役所）と多く見られ、10 施設中 8 施設は官庁街を形成していた。なお、官公庁施設の札

図 20：松山の官庁街の立体的空間構成モデル（昭和 2 年）

図 21：高知の官庁街の立体的空間構成モデル（昭和 5 年）

図 22：福岡の官庁街の立体的空間構成モデル（昭和 11 年）

図 23：鹿児島の官庁街の立体的空間構成モデル（昭和 10 年）

主要街路（旧大手道・旧街道・近代都市軸（路面電車の路線）等）			
建物	オープンスペース	門	
正面性	路面電車の路線	鉄道路線	
堀・河川	城山・土塁	赤・青札	
札以外の文字は筆者が加筆した			

図 24：図 8～図 23 の凡例

表 3：吉田初三郎鳥瞰図に描かれた赤と青の長方形の札

自然	107
歴史的資源	52
近代都市施設	15
合計	174

の色は青札が多い（10 施設中 9 施設）。この結果から、官庁街は当時の近代都市景観を代表するものだったことが分かる。

（3）官庁街を形成する官公庁施設等の立地形式

官庁街を形成する官公庁施設等の立地形式について、施設が面する外部空間に着目して以下の 4 パターンに分類した。すなわち、主要街路沿い、主要街路のアイキャッチ、堀・川沿い、山裾沿いである。この 4 つのパターンに該当する施設を各都市毎に整理したのが図 25 である。これを見ると、主要街路沿いに多くの施設が立地すること（16 都市 59 施設）、主要街路のアイキャッチに立地する施設は県庁舎が多いこと（8 施設中 5 施設）が分かる。

次に施設の正面性と外部空間との関係性を分析した結果、施設の正面性が確認された 48 施設中、45 施設が図 25 の模式図と同じ向きに正面性を向けていた^{注 13)}。このことから、主要街路、堀・川、山裾といった城郭地区の空間構成に対応した施設の配置計画が読み取れる。

（4）官庁街の立体的空間構成

各都市の官庁街の立体的空間構成モデルは上記で分析した 4 つのパターンの組み合わせにより把握することができる（図 26）。例えば、盛岡では、主要街路沿いと主要街路のアイキャッチという 2 つのパターンの組み合わせにより官庁街が形成されていると理解できるし、高知では、山裾沿い、堀沿い、主要街路沿い、主要街路のアイキャッチという 4 つのパターンの組み合わせにより官庁街が形成されていると理解できる。

6. 結論

吉田初三郎鳥瞰図はデフォルメを特徴としており、研究用資料として用いるためには地形図や写真や絵画資料等による補完が欠かせないことを指摘し、研究用資料としての可能性を検討した上で、以下の 2 点が明らかとなった。

（1）官庁街の立体的空間構成分析に有効な吉田初三郎鳥瞰図

吉田初三郎鳥瞰図を用いて官庁街の空間構成を立体的に俯瞰することにより、官公庁施設個々の配置の状況や正面性、官庁街の全体構成や、周辺の物理的状況を把握できることが明らかとなった。

（2）官庁街の立体的空間構成の特徴

吉田初三郎鳥瞰図の所在が確認された 18 都市を対象として、官庁街を形成する官公庁施設等が面する外部空間に着目して、施設の立地形式を分析した結果、主要街路沿い（16 都市 59 施設）、主要街路のアイキャッチ（8 都市 8 施設）、堀・川沿い（7 都市 15 施設）、山裾沿い（4 都市 10 施設）に施設が立地していることが分かった。

また、これらの組み合わせにより各都市の官庁街の立体的空間構成モデルが把握できることも確認された。すなわち、大手道、堀、山裾等の城郭地区の空間構成に対応した立体的な官庁街の都市デザインの構成原理が存在したことが明らかとなった。

なお、本稿で作成した吉田初三郎鳥瞰図に描かれた官庁街の立体的空間構成モデルと、当時の都市地図・地形図・写真を用いた昭和初期の官庁街の都市デザイン手法の分析は既往研究²¹⁾で行っている。

謝辞

本研究の一部は大森都市研究振興財団平成 16 年度助成金及び文部科学省科学研究費補助金（若手研究 B、研究代表者：松浦健治郎、課題番号 14750506）の助成を受けた。また、本稿の一部は日下部聡君（カクオ・アーキテクト・オフィス）との共同研究の成果である既発表論文²²⁾に加筆・修正を加えたものである。本研究で用いた吉田初三郎鳥瞰図の一部は、北海道浅井学園大学水野研究室所蔵のものであり、水野先生には快く資料をご提供頂いた。また、吉田初三郎のご子孫である吉田博真氏、阿瀬太紀氏には吉田初三郎鳥瞰図を研究用資料として利用することにご承諾頂いた。さらには、吉田初三郎鳥瞰図の収集方法について堺市博物館の矢内一磨氏、京都府立総合資料館、名鉄資料館の方々、郷土資料の検索等で対象都市の府県市立図書館の司書の方々には大変お世話になった。最後に、匿名査読者より貴重なコメントを頂き、研究内容を深めることができた。ここに記し、心から感謝申し上げる。

立地形式	都市名	主要街路沿い	主要街路のアイキャッチ	堀・川沿い	山裾沿い
1	盛岡	縣廳、裁判所、公會堂、工業試験場、警察署、女子師範学校	市役所		
2	秋田	裁判所、女子師範学校	秋田縣廳	秋田市役所、物産館	
3	福島	第一小学校、市役所、大原病院、警察署、公立福島病院、縣會議事堂	縣廳		
4	水戸	警察署、営林署、連隊區司令部、高等女学校	縣廳		
5	前橋	市役所、図書館、群馬會館、裁判所、郵便局	県會議事堂		
6	富山	郵便局、警察署、図書館、市役所、商工会議所、商品陳列所		県會議事堂、県廳、図書館	
7	金沢	縣廳、縣會議事堂、高等学校、市役所、女子師範学校、第一高等女学校			
8	福井	図書館、市廳、市公会堂	縣廳	警察署出張所、営林署、武徳殿	
9	甲府	郵便局、警察署、裁判所、縣病院			縣廳、議事堂、武徳殿
10	名古屋	市役所、縣廳			
11	津	津市役所、郵便局		師範学校、安濃津裁判所	
12	岡山	縣廳、縣會議事堂			
13	広島	官庁街が存在しない			
14	徳島	市役所、警察署、裁判所、物産陳列所		縣廳、中学校、専売局	
15	松山				赤十字支社、縣廳、商品陳列所、裁判所
16	高知	高知市役所	高知縣廳	縣公会堂	高知縣廳、縣公会堂
17	福岡	福岡縣廳、市役所、福岡郵便局		福岡縣廳	
18	鹿児島	縣庁、中央公民館、郵便局	市庁		鹿児島大学

図 25：官庁街を形成する官公庁施設等の立地形式

図 26：吉田初三郎鳥瞰図に描かれた昭和初期の官庁街の立体的空間構成モデル

- 注 1) 本研究では、官庁街を、1) 官公庁施設が2以上含まれること、2) 府県庁舎又は市庁舎が含まれること、3) 各官公庁施設は互いに隣り合った街区にあること、従って図 27 より、4) 施設間距離は 200m 以内であること、と定義した。
- 注 2) 参考文献 18) p.76 より
- 注 3) 用いた地形図は「名古屋北部」(測量年:昭和 13 年、発行年:昭和 16 年)、「名古屋南部」(測量年:昭和 12 年、発行年:昭和 17 年)、共に縮尺:1/50,000、である。
- 注 4) 官公庁施設に関するものとして、官公庁施設等の建物・正面性・門・オープンスペースを、城下町基盤に関するものとして、堀・河川・城山・土塁を、都市軸に関するものとして、主要街路・路面電車の路線・鉄道路線を取り上げた。
- 注 5) 用いた都市地図は「昭和初期日本都市地図集成」(柏書房、1986) である。
- 注 6) 官公庁施設等とは「官公庁施設・教育施設・文化施設・医療施設」である。また、官公庁施設とは、国家機関及び地方公共団体がその事務を処理するために使用する建築物をいい、官舎・学校・病院・工場・軍事施設・文化施設を除くものとする。本研究で取り扱う官公庁施設は、府県庁舎・市庁舎・議事堂・裁判所・控訴院・税務署・警察署・警察本部・郵便局・郵便電信局・電信局・大林区所・小林区所・役場・鉄道局・造幣局であり、その性格上、刑務所・郡役所は扱わない。
- 注 7) 主要街路とは藩政期の主要街路(大手道、広小路、街道)及び昭和初期の主要街路(路面電車の路線が通っている大通り等)とした。
- 注 8) 参考文献 17) p.13 より
- 注 9) 参考文献 17) p.10-11 より
- 注 10) 参考文献 17) p.7 より
- 注 11) 参考文献 17) p.10 より
- 注 12) 吉田初三郎鳥瞰図は折本になっており、表面には鳥瞰図が描かれ、裏面にはその都市の概要や名所の説明文が載せられている。名古屋の場合、青色の札で示された 3 施設については、「中央に時計塔の聳る五層近世様式に日本趣味を加味した大建築」「偉観を呈して」など建物の外観に関する記述が見られた。
- 注 13) 富山の図書館は主要街路沿いに堀・川沿いに立地しているため、1 施設であるが 2 施設と見なして計算した。

参考文献

- 1) 松浦健治郎・横田嘉宏・日下部聡・浦山益郎・佐藤滋：近世城下町を基盤とする府県庁所在都市における明治・大正期の官庁街の形成と都心改編，日本建築学会計画系論文第 581 号，p.p.67-74，2004
- 2) 菊池重郎：府県庁舎 100 年の歩み，公共建築 VOL.5，p.p.22-41，1963

- 3) 石田潤一郎：都道府県庁舎—その建築的考察，思文閣出版，1993
- 4) 佐藤武夫：市庁舎建築，相模書房，1966
- 5) 鍋田道雄：市庁舎・町役場，井上書院，1982
- 6) 中井邦夫・坂本一成：現代日本の市庁舎建築における空間構成と用途的分節外形ボリュームの分節による建築の構成形式に関する研究，日本建築学会計画系論文第 519 号，p.p.147-153，1999
- 7) 藤森照信：エンデ・ベックマンによる官庁集中計画の研究その 1 発端よりベックマン来日まで，日本建築学会論文報告集第 271 号，p.p.131-137，1978
- 8) 藤森照信：エンデ・ベックマンによる官庁集中計画の研究その 2 ベックマン帰国からエンデ来日帰国まで，日本建築学会論文報告集第 272 号，p.p.151-158，1978
- 9) 藤森照信：エンデ・ベックマンによる官庁集中計画の研究その 3 廃局へ，日本建築学会論文報告集第 273 号，p.p.141-148，1978
- 10) 藤森照信：エンデ・ベックマンによる官庁集中計画の研究その 4 建築各論，日本建築学会論文報告集第 280 号，p.p.179-190，1979
- 11) 藤森照信：エンデ・ベックマンによる官庁集中計画の研究その 5 建築家及び技術者各論，日本建築学会論文報告集第 281 号，p.p.173-180，1979
- 12) 藤森照信：明治の東京計画，岩波書店，1982
- 13) 藤森照信：都市建築，岩波書店，1990
- 14) 野嶋敏・伊藤弘明・坂口潤・佐藤洋一・戸沼幸市：官庁街における空間構成の変遷とその要因・庁舎の形態・庁舎の配置・分布に着目して，日本建築学会大会学術講演梗概集 F 分冊，p.p.247-248，1993
- 15) 佐藤滋：野中勝利：三島通庸の城下町改造とその後の都市骨格の形成—山形と宇都宮を事例に—，日本都市計画学会学術研究発表会論文第 28 号，p.p.235-240，1993
- 16) 野中勝利：三島通庸による明治初期の山形・官庁街建設における計画意図，日本建築学会計画系論文第 589 号，p.p.129-136，2005
- 17) 吉田初三郎：如何にして初三郎鳥瞰図は生まれたか，『旅と名所』創刊号，観光社，1928
- 18) 水野信太郎・水野由美：都市鳥瞰図と吉田初三郎，金沢学院大学都市学研究所創刊号，p.p.75-86，1999
- 19) 宮本雅明：近世初期城下町のヴィスタに基づく都市設計—諸類型とその変容，『建築史学』第 6 号，p.p.72-103，1986
- 20) 宮本雅明：近世初期城下町のヴィスタに基づく都市設計—その実態と意味，『建築史学』第 4 号，p.p.69-91，1985
- 21) 松浦健治郎・日下部聡・横田嘉宏・山口庸介・浦山益郎：近世城下町を基盤とする府県庁所在都市における昭和初期の官庁街の都市デザイン手法，日本建築学会計画系論文第 588 号，p.p.87-94，2005
- 22) 日下部聡・松浦健治郎・横田嘉宏・浦山益郎：近世城下町を基盤とする府県庁所在都市における官庁街の形成手法に関する研究 その 3 —昭和初期における官庁街の空間構成を分析する資料としての吉田初三郎鳥瞰図の可能性—，日本建築学会東海支部研究報告集第 42 号，p.p.685-688，2004

(2005 年 5 月 10 日原稿受理，2006 年 1 月 12 日採用決定)